

「地元学」から地域活動への展開

はじめに

地域の資源を見出して活用につなげる契機のひとつに「地元学」があります。

「地元学」とは、地域住民と外部の人との対話によって普段の生活や生業に蓄積された知恵や思いを調べる試みです。その後継的な取り組みを展開することにより、交流活動、商品開発、定住促進などへの発展が十分に見込まれます。

本稿では、「地元学」の実践の経緯を紹介し、外部人材である大学が地域といかに関わり、活動につなげることができているのかを解説します。

「地元学」とは

本稿で取り扱う「地元学」は、「地元学ネットワーク」主宰の吉本哲郎氏の実践を指しています。「地元学」とは何かについて、吉本氏は「人が元気になる・自然が元気になる・経済が元気になる」ものと表現しています。

「地元学」の実践方法に決まった形はありませんが、多くの場合、図1のよう



図1 「地元学」の進め方の一例。「土の人」の実感に接近することが大事。

な手順で進めています。通常は、学生などの外部からやって来た「風の人」とそこに住む「土の人」が出会い、暮らしや生業を見たり聞いたりしながら詳しく調べます。「風の人」は、「土の人」に何かを教えたり指導したりはしません。「土の人」が自分の生活を語ることによって、そこに秘められた思い、知恵や技などを見つけていきます。「風の人」

は、見聞きした事柄をありのままに文章や絵地図などで表現し、「土の人」達に発表します。その過程を通して、これまでも何もないと思っていた地域や普段の暮らしにこそ価値があると気づかされ、「風の人」と「土の人」の間に共感が生まれます。

筆者は、この過程で重要なのは、事柄の詳細の把握に終始するだけではなく、「土の人」の実感にできる限り接近することだと考えています。つまり、「地元学」とは地元の人の気持ちに寄り添う姿勢に他なりません。この点は、課題ありきで行う調査とは一線を画しています。一般的に、外部者が行う地域現場での活動は、フィールドワーク、地域学、そして地元学とも称されることがあります。しかしここでは、地元の人々の気持ちに寄り添うという認識から、括弧つきで「地元学」と表現させていただきました。なお、吉本氏によると、「地元学」の英訳は「Local Study」等ではなく「Jimoto gaku」ということです。

1つの場所での「地元学」の実践は一



愛媛大学
社会共創学部 特任講師
笠松 浩樹